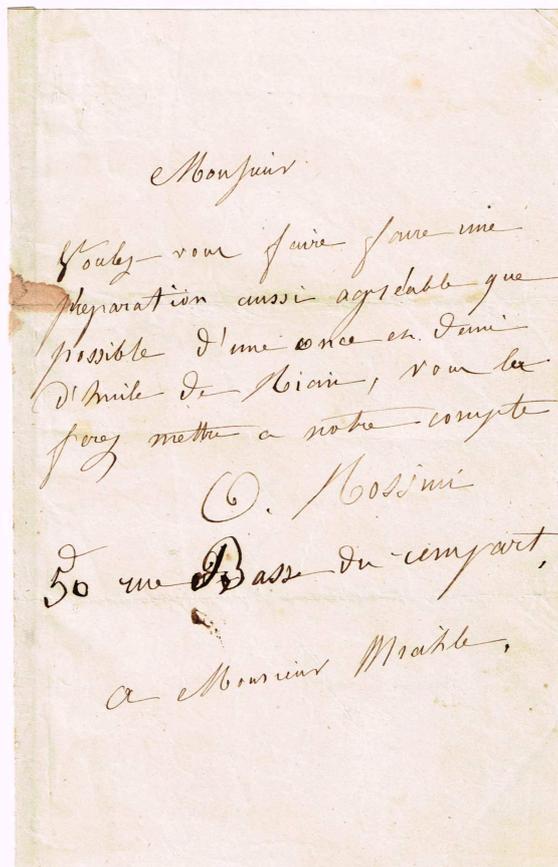


オランプ・ロッシーニ[オランプ・ペリシエ]自筆書簡 日付なし[1855~58年]

(水谷彰良コレクションより)

オランプ・ロッシーニ[オランプ・ペリシエ]自筆書簡 ミアール氏宛[日付なし。1855~58年]



A Monsieur Miahle., Lettera autografa di Olympe Rossini [Olympe Pélissier], [Paris, s.d. (1855-58)]
[Collezione privata di Akira Mizutani - Tokyo]

解説

これはロッシーニの二人目の妻オランプ・ペリシエ (Olympe Pélissier, 1797-1878) が薬剤師ミアール氏 (Monsieur Miahle) に宛てた手紙である (署名は O. Rossini)。サイズは 20.5×13 cm。本来の用紙は横長 26×20.5 cm で、宛名と住所を記したと思われる左半分が失われている。日付は無いが、50 rue Basse-du-Rempart (バス=デュ=ランパール通り 50 番) の住所記載から 1855~58 年と判断しうる¹。宛名ミアールはパリの有名な薬剤師ルイ・ミアール (Louis Miahle, 1807-86) であろう。ルイ・ミアールはパリの諸病院の薬剤師を務め、ミネラル・ウォーターや消化機能に関する研究論文発表してパリの医学部の科学・薬学助教授となっていた (1867 年 7 月、ナポレオン 3 世の医学・薬学アカデミー会員に選ばれる)。

腸や消化器官の病気を患うロッシーニは妻オランプを通じてミアールに薬の処方依頼していたらしく、この手紙では「ひまし油 (L'huile de ricin) (当時は下剤として使われた) を求めている——「できるだけ 1 オンス半のひまし油をご用意ください」。晩年のロッシーニのピアノ曲に〈ひまし油の小ワルツ (Petite valse [L'huile de Ricin])〉があり²、身近な薬の一つだったことが判る。

(2014 年 11 月作成。水谷彰良)

¹ ロッシーニ夫妻は 1855 年にパリに移り、58 年までバス=デュ=ランパール通り 52 番のアパートマンで生活した。建物は現存しないが、オランプの書いた 50 番も同じ建物と思われ、58 年に引っ越して以後この住所に住んでいない。

² 「老いの過ち」第 7 巻《蕨ぶき家のアルバム》第 6 曲。